

# ジャパニーズ・イングリッシ考

向井 俊二

「バー」と「パール」が同じ言葉だということに気がついたのは、恥かしながらそう遠い昔のことではない。私が初めてパールという言葉を目にしたのは、松川事件の報道だったと思う。今では知る人も少なくなりましたが、1949年東北本線で発生した列車脱線転覆事故が人為的にひきおこされたものであり、近くにパールとスパナが遺棄されていて、犯人がそれを使ってレールの継ぎ目板を外し、犬釘を抜きとったのだという。それからこの事件にかかわるとてつもなく長い裁判が続いて、最終的に最高裁の被告全員の無罪をもって結着してから更にだいぶたったあと、ある英語の授業のテキストに出てきた crowbar について考えるうち、そのコンテクストからして、これがかのパールというやつに違いないということが、事件の思い出とともに不意に頭に浮かんだのである。それまでは bar といえば走り高飛びや棒高飛びのバーであって、工具としてのパールをも意味することには思い至らなかったのである。

そう考えると、同じ言葉の日本読みを変えることによって、意味まで変えてしまう例は他にもある。ストライクとストライキ、レコーダーとリコーダー(笛)、アイロンとアイアン(ゴルフ用クラブ)、シートとシード(天幕、帆)——これは単数・複数による区別でもある。

一方意味が同じで、英語の普及につれて原音に近づけようとしたのが、テキスト対テクスト、インキ対インク、しかしもともとキの方が日本人になじみやすいのか、エキストラは依然としてそのままである。同様に paint (オランダ語 pek) はペンキであってペンクではない。ヨードチンキはかつて家庭の常備薬だったが、インキ、ペンキ、ヨードチンキと、よく使う液状の製品を同じ発音の語尾で統一することで、これらの言葉が覚えやすく、言いやすくなったことだろう。ここになんとなく庶民の知えを感じる。

韻やリズムによって言葉に音楽性を与えるのは、詩を発想する高度な知的活動だが、もともと

これは人間の根源的な衝動に発しているのだろう。だから今みたように庶民の実際的な感覚にもつながる。語呂合わせは昔から日本人の好む言葉の遊びであった。それが外来語にも及んで、フランネルとリンネル、これにセルを加えると生地屋が開店できる。マカロ煮はアーケード街の食品店の店先にまことによく似合う。トラブルのルはラ行四段活用の終止形というわけだ。フリーターは、ライター、レポーター、ピンチヒッターに合わせたのか。だがこの本来の英語は何か、という問題が平成3年度の本学の入学試験に出た時、私は頭をかかえてしまった。

語呂合わせには愉快なものもあるが、内容的にはダジャレが多く、ダジャレはえてして品の悪いものである。そして事の本質をはぐらかしてしまう。太平洋戦争は日本の航空部隊によるパールハーバーの奇襲攻撃から始まったが、それから半年もたたないうちにアメリカの爆撃機が日本本土に襲撃して全国民を驚かせた。この時軍や報道機関は国民の動揺を抑えるために、攻撃部隊の指揮をとった James Doolittle (この人は数々の飛行記録を樹立し Charles Lindburgh と並んで航空界ではよく知られていた) を do little ともじって一笑に付する態度をよそおった。しかし誰知ろう、この事件こそ一か月後のミッドウェーの大敗を誘発し、やがては日本全土が空から降り注ぐ火の雨によって焼土と化す前触れだったのだ。空疎な言葉に酔いしれていた当時の日本人の運命を象徴する出来事として、今でも私の心に焼き付いている。